

## ロマン派と政治的ロマン主義

カッシーラーとマイネッケによる評価をめぐって

岩本智孝(大阪大学)

20世紀の哲学者エルンスト・カッシーラー(1874-1945)は、配偶者のトーニ・カッシーラーも回想しているように、自らの政治信条を思想として開陳することはめったになかった。そのエルンスト・カッシーラーが人種差別を実際に体験し、ナチス政権下でドイツを離れざるをえなくなった晩年に書いたのが『国家の神話』(1946)である。同書は、カッシーラーが唯一国家と政治というテーマを大々的に取り上げた文献であり、国家と政治、神話というキーワードとともにファシズム・レイシズムの思想的淵源をたどる構成となっている。

この『国家の神話』において興味深いのが、カッシーラーが、文学・思想上のロマン派にロマン主義思想を政治的に変換する意図はなく、全体主義思想観の成立に寄与してはいない、と述べている点である。ロマン主義を政治化したもの——政治的ロマン主義——は、政治学者カール・シュミットが『政治的ロマン主義』(1919)において取り上げたことで広く知られるようになった。シュミットがこの概念を有名にさせたことは言うまでもないが、彼のみがこの概念を取り扱ったわけではない。

この政治的ロマン主義というテーマに照らして、本発表ではカッシーラーと並べて歴史学者フリードリヒ・マイネッケ(1862-1954)を取り上げる。マイネッケはカッシーラーと同時代の人物で、歴史学のみならず歴史哲学や政治哲学においても功績を残している。マイネッケの数多くの文献のうち、本発表で主に検討するのは、政治哲学的著作である『世界市民主義と国民国家』である。同書の初版は1907年と第一次世界大戦よりも前であり、その後版が重ねられる中で内容に訂正が加えられるものの、やはりこの1907年という早い時期に政治的ロマン主義に焦点を当てたことは特筆に値する。マイネッケを本発表で取り扱う意義は、①カッシーラーと同時代を生き、②カッシーラーと同じく思想史を重要な仕事の一つとし、③政治的ロマン主義に早くから注目していたという三点にある。

思想としてのロマン主義や政治的ロマン主義が、ナチズムの成立になんらかの影響を与えていると考える見方(少なくとも、ロマン主義が政治的に強い攻撃性を発揮してきたと考える見方)は、カッシーラーらと同時代の哲学者ヘルムート・プレスナーの『遅れてきた国民』(1959)や、思想史研究者のリュディガー・ザフランスキーの『ロマン主義』(2007)など一定数存在する。また、そもそもドイツ・ロマン主義の先駆者とされるヨハン・ゴットフリート・ヘルダーがドイツ・ナショナリズムの祖ともされるなど、むしろロマン主義とナチズムを結びつける論調は強いと言ってよい。また、このような論調があることをカッシーラー自身が認めた上で先の『国家の神話』でのロマン主義擁護の主張をおこなっていることを付言しておく。

ここに挙げた論者たちは、どのような概念をめぐって争っているのだろうか。これを問わなければならないのは、ロマン主義が多義的な概念であるからだ。本発表の射程を明示化するために、ここでロマン主義の一般的な定義を確認しておく。まず、文学・芸術上のロマン派の運動としてのロマン主義に対置されるのは古典主義である。古典主義は、ギリシア・ローマの文学・芸術を模範とし、その復興の名のもと秩序と調和を尊ぶ作風をもつ。それに対し、文学・芸術上のロマン主義は、個人の感情の発露を

芸術作品に反映することを最重要視する。そして、ロマン主義が思想史的文脈に置かれたときに対置されるのが啓蒙主義である。啓蒙主義は、中世以来の慣習や封建制を斥け、近代的・合理的の精神を旨とする立場である。それに対し、思想史上のロマン主義および政治的ロマン主義は、中世への憧憬をもち、理性に懐疑的な目を向け感情の重要性を訴える立場である。以上のように、文学・芸術上のロマン主義／古典主義と、思想史上のロマン主義／啓蒙主義は対応関係にある。

また、ロマン主義の地域による受容のされ方の相違も考慮されなければならない。本発表では、ロマン主義とナチズムとの関係について扱う以上、ドイツ・ロマン主義に議論を限定する。ドイツ・ロマン主義は、フランス・ロマン主義の祖であるルソーからの影響のみならず、18世紀後半から19世紀初頭にかけて、カントやその後継者と並走しつつ、非理性的な立場から批判の眼差しを向けてきたハーマン、ヤコービ、そして、ヘルダーの影響もまた受けていた。さらに、当時のドイツが領邦国家体制下において、統一国家の希求が差し迫った課題として存在していたことが、つまり、プレスナーが言うように、当時のドイツの〈遅れ〉が、ドイツ・ロマン主義が強く政治性を帯びることとなった背景となっていることも見逃せない。

以上のような背景がある中、発表者が本発表で明らかにしたいことは以下の二つの問いに対する答えである。

(1)カッシーラーがなぜロマン派を〈全体主義思想観の成立に寄与した〉という汚名から救おうとしたのか。(2)ロマン派をその汚名から救うことはそもそも適切なのか(すなわち、汚名から逃れえないのではないのか)。第一の問いについては、主にカッシーラーの一次文献の検討を通じて明らかにする。カッシーラーは哲学史・思想史研究を重要なライフワークとした哲学者であり、ロマン主義思想についても、主著『シンボル形式の哲学』第一巻(1923)や哲学史研究の著作である『認識問題』第四巻(1957)、そしてすでに挙げた『国家の神話』をはじめとして、多くの著作で取り上げている。とりわけ〈ドイツ・ロマン主義の先駆者〉〈ドイツ・ナショナリズムの祖〉とされてきたヘルダーに対するカッシーラーの評価を検討し明らかにすることが本発表の重要な仕事の一つである。

第二の問いについては、マイネッケが歴史学者という立場から捉えたロマン派とロマン主義の関係がどのようなものであるのかを、『世界市民主義と国民国家』を中心に読み解いて明らかにすることによって応答する。そして、そこから得られたロマン派と政治的ロマン主義の関係についての知見にもとづいて、カッシーラーのロマン派擁護が、プレスナーらの主張に対して充分反論できるだけの論理性を備えていることを明らかにする。